

仙台に住みついて35年

(株) 東京ソイルリサーチ
東北支店長

飯村 次雄



「人物」などと紹介されるような経歴もなく、また協会活動に参加したこともないのにこのような欄にしゃしゃり出るのは非常に気がひけるのですが、これから活動しなさいという励ましの意味に解釈して自己紹介をします。

1. 氏・素性

生まれは茨城県つくば市（旧筑波町：筑波山の麓）。飯村という姓は全国的にマイナーですが旧筑波町では最多の姓です。しかし特に大物もいなければこれといったいわく因縁ありません。

2. 地学を志した理由

高校時代は漠然と理系の進学を考えていました。しかし生物の先生に嫌気がさし、化学は亀甲マークに挫折し、物理は電磁波に弾き飛ばされ、残る地学には少女に憧れるごとき淡い恋心を抱いていたというアホな理由でした。

3. 大学時代

学生運動のはなやかな時代でした。東大安田講堂の攻防や今映画で話題の浅間山荘事件などの派手な事件が起き、白黒テレビを複雑な気持ちで見入っていました。そのうち大学もバリエード封鎖やストになり、水泳部に入っていたので北六番丁のプールに通ってマージャンに明け暮れていました。

5年目にやっと専門課程に進み、卒論のフィールドは岩手県住田町が割り当てられました。夏休み返上で北上山地をさまよっているうちに「何で地質だけが卒論研究のために自腹で旅館代

を払わなくてはいけないのか」の疑問と持ち前の怠け癖が頭をもたげ、指導教官には愛想をつかされて追い出されるように卒業しました。

4. 就職

昭和49年はオイルショックの直前で、列島改造ブームの最後の年だったと思います。しかし右肩上がりの経済成長はまだまだ続くと思われており、どんな出来の悪い学生でも引く手あまたの時代でした。

就職先については生意気にも土木屋の風下に立つのがいやだという理由で地質コンサルを考えていましたが、じきに地質屋が土木屋のバシリであることを否応なしに思い知らされました。

5. 新入社員時代

東京で半年間の研修の後、仙台勤務を命ぜられ11月中旬に赴任しました。翌日引越しの荷物もほどかないで出社すると、大学の先輩でもある上司が一枚の地図を持ってきて、湯殿山の地すべり現場に行って観測計器を回収するよう命令されました。当時は車の免許はなく、列車で鶴岡まで行きましたが季節外れの大雪でバスがストップしており、何もできずに仙台に帰りました。後日協力会社の運転手を伴い現地に行ったところ積雪が50cmもあり、一面雪の原。地図を見ても何も探せず、やはり何もできずに仙台に帰りました。

なにか場違いな世界に入ったような感じがしたことを覚えています。これがきっかけでしばらくは地すべりをやっておりました。

6. 地震・雷・火事・親父

仙台に35年も住んでいますと一通りの災害を経験します。1回目の結婚記念日に起きた宮城県沖地震、マンホールから数mの水柱が上がった恐怖の400mm 8.5豪雨や送電鉄塔が鉛のように曲がったクリスマス豪雪、猛烈な西風のなか酒田から鶴岡に向かっているときに発生した酒田大火。

被災者には気の毒ですが、天変地異は私たちの仕事の柱の1つである「防災」の教師ともいえます。今思えば社会に出てからも出来の悪い学生で、天の教えを生かしていないことに忸怩たる思いがあります。

7. 生涯1地質屋

先の見えない大不況の中、支店運営や協会理事としての活動？など不慣れ・不得手なことに努力しなければならぬ立場になり、世間知らずの技術屋ですからという逃げ口上も使えなくなってきました。しかしフィールド全体を見渡し、かつ小さな露頭から重要なエビデンスを見つけ出す地質屋の目・感覚だけは持ち続けたいと思っています。

<プロフィール>

出身地：茨城県つくば市（旧筑波郡筑波町）

生年月日：昭和24年12月3日

学歴：昭和49年 東北大学理学部地学科（地質学古生物学教室）卒

職歴：昭和49年 東建地質調査（株）入社 同11月仙台出張所配属

昭和63年（株）東京ソイルリサーチ入社 仙台営業所配属

平成12年 東北支店長

趣味：カマカセのゴルフ（最近当然ながら腕力も衰えている）

パソコン相手の将棋（覇眼目にみて初段）

ザル碁（碁敵がいないので最近打っていない）

マージャン（水泳部時代みっちり修行したのでやや自信あり）